

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-750	15-060	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門
題名 (原題/訳)		
<p>Higher usual alcohol consumption was associated with a lower 41-y mortality risk from coronary artery disease in men independent of genetic and common environmental factors: the prospective NHLBI Twin Study.</p> <p>飲酒は遺伝及び環境要因と独立して 41 年間の冠動脈疾患死亡リスクの低下と関連する : NHLBI 前向き双生児研究</p>		
執筆者		
Dai J, Mukamal KJ, Krasnow RE, Swan GE, Reed T.		
掲載誌		
Am J Clin Nutr. 2015 Jul;102(1):31-9. doi: 10.3945/ajcn.114.106435.		
キーワード		PMID
冠動脈疾患死亡、双生児、コホート研究		25948664
要 旨		
<p>目的： 飲酒が、遺伝要因や胎児期の環境とは独立して長期の冠動脈疾患死亡リスクと関連するかは明らかでなかった。家族要因とは独立した両者の関連を明らかにする。</p> <p>方法： NHLBI 双生児研究における冠動脈疾患の既往のない 843 組の男性の双生児（42-55 歳、平均 48 歳）においてベースライン（1969-1973 年）の飲酒状況を調べ、2010 年まで前向きに追跡した。過去の習慣的飲酒量を調査した。冠動脈疾患死亡および、循環器疾患死亡、総死亡をアウトカムとした。ハザード比は frailty 生存モデルにて算出した。</p> <p>結果： 41 年間に 129 例の冠動脈疾患死亡があった。コホート全体では、カロリー摂取および循環器危険因子調整後、飲酒 10g 上昇当たりハザード比は 0.94 (95%CI 0.89-0.98) であった。双生児間で調整した、一方の双生児の飲酒量 10g 上昇当たりハザード比は 0.90 (95%CI 0.84-0.97) であった。この関連は一卵性双生児に限定しても同様であった。アルコールの種類による検討でも同様の傾向であった。飲酒量と総死亡リスクとの関連はなかった。</p> <p>結論： より多い飲酒量は、遺伝要因や双生児間の小児期や成人期の環境要因とは独立して冠動脈疾患死亡リスクの低下と関連し、因果関係があると考えられた。</p>		